

片岡美保香 展 日常とユーモア

令和5年12月5日(火)～令和6年1月28日(日)

ごあいさつ

ある時、たい焼きを食べる前に何か眺めてみたくなった。すると、なんと可愛い。合わせられた顔がずれている。あんこが外にはみ出している。こんなに面白いものを私は気にせず食べていたのかと気付かされた。ひとくちかじる。ふたくちかじる。毎回違う表情を見せる。それは私に新しい発見を与えてくれた。人は当たり前だと思っていることほど気にしないことが多い。当たり前を当たり前だと思いつぎすぎている。私もその一人だった。ただ、少し角度を変えて物事を見たり、少し組み合わせを変えるだけで、新鮮で、全く違うものになる。身近すぎて気がつかないが、身の回りはこんなにも面白いものに溢れている。だが、世の中はどんどん新しいものを作り出す。新しいものに溢れすぎて身近なものが当たり前になりすぎて、その良さや面白さ、ありがたさを忘れ、気づかずに過ごしてしまう。勿体無い。

私はたい焼きをきっかけに身近なものをよく眺めるようになった。色、形、素材、表情…。それらを眺め、作品として変換して当たり前だったものの価値を考え直しながら制作を続けている。



「選択」(2021年)



「そんな気分。」(2022年)



「見て!」(2022年)



「至福」(2022年)



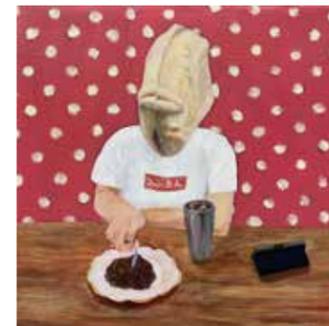
「夢中」(2023年)



「寝落ち」(2023年)



「何も考えない」(2023年)



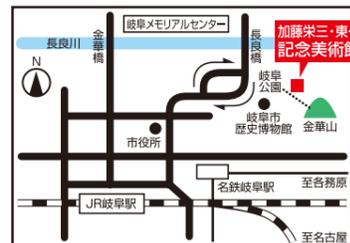
「祝い事」(2023年)

岐阜市歴史博物館分館 加藤栄三・東一記念美術館

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46(岐阜公園内) TEL・FAX058(264)6410

交通案内 JR岐阜駅または名鉄岐阜駅から、長良橋方面行きバスで「岐阜公園歴史博物館前」で下車(所要時間約15分) 徒歩約5分(岐阜公園内・ロープウェイ駅横)

駐車場 岐阜公園北側の堤外駐車場(有料)をご利用ください。なるべく公共交通機関をご利用ください。



貴方も友の会会員になってみませんか!

岐阜市歴史博物館 加藤栄三・東一記念美術館 友の会 会員募集

—文化の時代 心に調いと豊かさを—

特典

- 会報の配布、各種催しもの案内が受けられます。
- 展覧会などの催しものが無料で何回でも観覧できます。
- 会員の引率する観覧者は団体割引料金になります。



加藤栄三「BANTING (牛)」(1960年)

令和5年10月3日(火)～令和6年1月28日(日)

第1展示室

加藤栄三・東一 日展出品作と下絵

第2展示室

はっ・とび 2

令和5年10月3日(火)～12月3日(日)



伊藤彰耳「十二神将(卯)」

カメラ・パソコン・AI・3Dを使い絵が描ける。その中で絵を自分の生きる力と共に描く。この意味を、描く人も見る人も考える時がかもしれません。日本に生活し、箸を使い、手の力加減を知り日本画を描いています。絵の力がここにもあります。

第2展示室

片岡美保香 展 日常とユーモア

令和5年12月5日(火)～令和6年1月28日(日)



片岡美保香「プールサイド会議」(2022年)

岐阜市歴史博物館分館

加藤栄三・東一記念美術館

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46(岐阜公園内) TEL・FAX058(264)6410

開館時間：午前9時～午後5時(午後4時30分までにご入館ください)

休館日：月曜日【10月9日、令和6年1月8日は開館】、10月10日(火)、11月24日(金)、12月28日(木)～令和6年1月3日(水)、1月9日(火)

観覧料：高校生以上310円(団体250円) 小中学生150円(団体90円)

※()内は20人以上の団体料金。
 ※身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、難病に関する医療受給者証の交付を受けている方、及びその介助者1人、岐阜市内在住の70歳以上の方は、証明書などを提示すると無料。岐阜市内の中学生以下の方は無料。
 ※家畜の日【令和5年10/15(日)、11/19(日)、12/17(日)、令和6年1/21(日)】に入館する中学生以下の方と、その家族は無料。

「はっ・とび2」のスタート

今回、「はっ・とび2」となり2回目の岐阜での展覧会を開催させていただきましたことになりました。
“日本画とはいかなる絵画表現か”を再確認するという意味で写生から大下図を作り、本画を描くという勉強会を始めました。これが「はっ・とび2」のスタートでした。
私たちは普段から鉛筆を使うことが多く、絵を描く時も鉛筆を使います。昔から日本の文化で大事にしてきた手の力。それを伝える筆。線を描く時、出来るだけ細く、一定の細さで筆を動かします。緊張します。慎重にゆっくり描く線には描く人の“気”が籠っているようです。絵の力に大事な線になっているはず。この線にはゆらぎがあり、生き生きとしています。
大下図の最後は鉛筆ではなく筆の緑で締め括りたいと思っています。

「日本画を描き続ける覚悟をもっとつける。」「写生をもっとしっかり描く習慣をつける。」「大下図を描くことで画面を整理する。」「細い筆の線の力を認識してゆくこと。」「はっ・とび2」はこれを守り勉強を続けていけるメンバーだと信じています。



小田切恵子「人と」

私達人は自然の中の一部です。この先、人は他の種からどう学んだり付き合ったら良いのか？そんな事を思いながら描いています。

茨城県に生まれ東京都で育つ。
女子美術大学芸術学部美術学科洋画専攻卒業、森田曠平門下で日本画を学ぶ。
現在、日本美術院特待。



永野浩子「みのり」

芸術は心のビタミン剤と言われています。日常生活の中で、時間をかけて描いたり、身近にある植物をみて、春夏秋冬を味わうのは、幸せなひとときです。いつも意識して行動するのはありませんが心む作品がかけましたら幸せと思いが続いています。

1936年 東京生まれ。
都立鷺宮高等学校卒業。
現在、日本篆刻家協会参与。



林 克彦「ある日」

最近は人物クロッキーをよく描いています。1・2分で描く場合や、時間をかけてじっくり描いたり、ダンサーを描く時は踊っている所を描きます。動いている人物を描く事は難しい、というより出来ません。出来ないことを知って、画材を変えたり表現方法を工夫することが、描くための筋肉を少しずつ鍛えているように感じます。夢中で描いた後、一枚一枚見返してみても、新しい自分を発見できたりすると嬉しく思います。そこで得たものを本画に活かす事に注力して制作をしています。

1970年 東京生まれ。
1997年 多摩美術大学大学院美術研究科修了。
現在、東京都東村山市在住。



霧生斐優子「椿の花が咲く頃」

長い間絵を描き続けていますが今だに“一枝花”も満足に描けていません。それでもなぜこんなにもたくさんの花を描こうとするのか自分でも反省しています。
春に草木がのびはじめ、たくさんの花が咲くときその空間には何かがあふれ出ていっぱいになっているような感じがして、つい座りこんでスケッチをはじめてしまいます。あふれる何かを体で感じていたいのかも知れません。

1936年 神奈川県横浜市生まれ。
横浜国立大学・美術科で主として彫塑美学を学ぶ。
卒業後6年間の小学校職員を経て“子供アトリエ”を開く。
42才から日本画を学びはじめ70才ではっ・とびの研究会に参加。82才ではっ・とび2の会員になる。

「あきらかに筆の線にも力がある」 ～伊藤髟耳の手記より～

大下図を描くときに線を使い、形を描き、最後は墨の線にします。うまい線でもきれいな線でもありません。大下図が出来たら念紙取りが待っています。
私は念紙取りにチャコペーパーを使い大下図を本紙に写します。写した線を面相筆でゆっくりと細い線で描いています。写した線は作品の力になっていると思います。私は日本画には線の存在感と力がとても大切だと思っています。生きる力(気)、生命力にも手がかかっていると思います。

墨の線を引くためにかなりの時間をかけて硯で墨をすります。墨の線を引くときは手の力加減が大きく関わります。1本の線を慎重にゆっくり引きます。そこには生き生きとした生命力のこもった線が生まれ、絵の力になっていると思います。
しかし、線は簡単には引けません。字を描くとき鉛筆、ボールペン、万年筆のような先の硬いものに慣れているので、筆で描けるようになるには時間がかかります。生きていくかのような線は人間である以上みな描けるはず。その力は柔軟で緊張のない心と、しっかりした体幹から生まれます。手先で描くのではなく、からだ全体で描くのです。力のある線はそこから生まれます。点を打つように、ゆっくり筆を動かすようにしています。



大町 遊「まなざし」

そのとき一番心が動いた対象をじっくり観察して制作することを心掛けています。愛犬の毎日を観察し続けているので、昨年からのモチーフは犬が多いです。日本画というものを改めて考え、線や美しい色の表現に迷いながらも、変化を恐れず模索し続け描いていきたいです。

東京生まれ。
東北芸術工科大学芸術学部美術科日本画コース卒業。グループ展や2人展等を経て、2022年より大下図を大切にすると、はっ・とび2に参加。



杉山 紅「あきのいろ」

題材は秋の山ぶどうとヤブガラシです。今回も白い画面は紙の地を活かして制作しました。
題材から教えて貰う気持ちを大切にたくさん写生をしています。紙の白の強さに負けないように、岩絵の具の発色を活かして明るい画面を心掛けた。最近では墨の線に強弱や濃淡を付けて線の表現も勉強しています。

1972年 東京生まれ。
1995年 玉川大学文学部芸術学科美術専攻 日本画課程卒業。
1996年 玉川大学芸術専攻科美術日本画修了。
2002年 再興院展初入選。
2009年 春の院展初入選。グループ展多数。伊藤髟耳に師事。
現在、日本美術院院友。



飯嶋智恵「におく」

「はっ・とび2」に参加してから、今年で5年目になります。はっ・とびの仲間になる前は、描く対象物から感じるものを、自身の想いや伝えたいこと、感情などを重ね合わせ、表現をしていましたが、今思えばそれはやや漠然とした活動でした。私の絵＝私、もしくは私が表現したいものではなかったように思います。
自分の分身がいくつもあるかのような、自分の中でそれらが統合されていないような感覚です。ではっ・とび2で様々な展示に参加していくうちに、頭では理解しているつもりが全く実践できていないことに、だんだんジレンマを懐くようになりました。それは、自分の絵が人に良く思われたという感情からきているのだと思います。
“私が私を信頼してない、私が表現したいものを私が信じてない。”この感覚が徐々に大きく、あきらかになっていきました。これは人が活ること、表現することの、最も基本だと感じます。描く対象物と向き合い、絵にする過程で、胸の内に様々な感情が溢れます。でも不思議と、余計なものはいらなくなるようになってきました。
何のために描くのか(活ること)、自分の為。自分の為に描くこと(活すること)は、自身の幸せの何の目的に繋がるのか。
それに自分で気付いていける場所に出逢えて、本当に幸せだと感じています。

1975年 千葉県生まれ。
1999年 女子美術大学芸術学部美術学科日本画専攻卒業。
2018年 はっ・とび2に参加。



安惠隆司「農」

日頃より動きのある絵が描けないかと画面に向き合う日々です。以前は京都のお寺さんなどの古い建物に興味がありスケッチに足を運ぶことが多かったのですが、最近は京都市動物園をはじめ、出かけた先の動物園で生き物を見ることが多くなりました。動物から感じる命の力強さにひかれているのだと思います。また、自宅で多くの植物を育てているのですが、夏の暑さ冬の寒さなど厳しい環境下でも命をつないでいく植物がいとおしく思います。そんな中、世界で人間同士が争い命を落とすしていくニュースを目にするのが痛みます。私自身なかなか思うような表現ができない中で、平和を願いながら命の尊さを少しでも表現できたらと思っています。

1964年 兵庫県神戸市生まれ。
1987年 上野の森美術館大賞展(88～90、96)。
1988年 京都教育大学教育専攻科修了。
1989年 第三文明展 第三文明賞(富士美術館買上)。
京展入選(以降、6回)。

1989年 青垣日本画展(同91年)。
1993年 臥龍桜日本画大賞展入選(同99年、02年)。
1998年 再興院展初入選。
1999年 てんびんの里日本画コンクール大賞。
2004年 日本画「京の今日」展出品。
現在、兵庫県日本画家連盟理事長、京都日本画家協会理事、日本美術院研究会員。



長谷川美恵「目覚め」

「目覚め」は、野毛山動物園で飼われていた雌のスマトラトラのミンビがモデルです。厚いアクリル板さえ無ければ触れるほど近くで無防備な寝姿を見せられました。なんと綺麗なトラなのだろうとスケッチし、瞳の輝きや筋肉の優美さ、美しい毛並みを少しでも表現できれば嬉しいなと思いながら描きました。毛の生え方、眼、耳の中などは家で倒っている猫をかなり参考にしました。
ミンビは今、上野動物園で仲間と広い飼育環境にいて近くに行っても描かせてもらうのは難しいのですが、今年の春には子トラも生まれて、良かったなあと感じています。

神奈川県横浜市生まれ。
神奈川県立栄養短期大学卒業。
2022年春の院展初入選。
現在、横浜美術協会理事、日本美術院研究会員。



高田峻典「Z世代」

【ゆらぎとらせん】自然が持つエネルギーの深さを自分なりに揺らぎとらせんで表現してみようという題材と向き合い、繰り返しの時間の中で素直な気持ちで描き出せたならばと思う。ゆらぎの中に身を置くと、なんとも言えぬ安らいだ気持ちやワクワクもしてくる。炎や煙、波や川の流れ、いつまでも飽きない。何だろう。木陰に包まれたゆらいでいる本当の形を見たいと思うと、輪郭そのものも見せてくれません。みんな動いている物ばかり。

1952年 千葉県生まれ。
1992年 再興院展初入選。
1994年 院友推荐。
1999年 第13回現代秀作美術展。
2003年 第1回「京の今日」展出品。
2018年 院展特待推荐。
現在、日本美術院特待。



石黒紀子「窓辺」

三年前から身近に有る物を描くようになりました。当初、その状況変化に抵抗感が有りましたが、身近に有る見慣れた物を如何に描くかと考える事が次第に楽しくなりました。昨年から絵の具を余り塗らずに白い空間を残す新しい描き方にも挑戦し始め、正に悪戦苦闘中です。今回も写生が足りず、大下図の詰めも甘く、本画の制作中に形を何箇所も直し、その線描きも鈍く、たくさんの課題が見つかりました。これからも私なりに出会えた題材と丁寧に向き合せて生き生きとした表現が出来る様に、そして固定観念に囚われない自由な発想で描き続けられたらと思っています。

1954年 神奈川県横浜市生まれ。
1976年 実践女子大学卒業。
1994年 第49回春の院展初入選。第79回再興院展初入選。
1998年 院友に推荐。
現在、日本美術院院友。

関連イベント

出品者による
ギャラリートーク

日時 令和5年
10月3日(火)・22日(日)
いずれも13:30～14:30

場所
加藤栄三・東一記念美術館
第2展示室 **※申込み不要**

伊藤髟耳先生による
ワークショップ

日時
令和5年**10月22日(日)**
10:00～11:30

場所
加藤栄三・東一記念美術館
ロビー

定員
先着10名(小中高校生対象)
※美術館までお電話でお申込みください。